

1958年の『裏と表』再刊の際に執筆された「序文」は、三つの機能を兼ね備えている。それは、単に約20年前に出版された『裏と表』の序文であるだけでなく、「序文」執筆までにカミュが執筆した全作品の後書きでもあり、また、カミュが「夢見る作品」と呼ぶ小説の予告でもある。この「序文」で、『裏と表』の「ウイとノンの間」と同様に「母親の沈黙」をその中心に据えることが予告されている小説とは、言うまでもなく『最初の人間』である。

この「序文」の作成は、実は1958年よりずっと前にさかのぼる。「序文」のタイプ原稿には、「1953年10月」ないし「1954年」という日付とカミュによる手書きの修正が残されている。興味深いことに、「序文」のタイプ原稿の紙の「すかし」を調べてみると、そのタイプ用紙が『手帖』の第1タイプ原稿の一部の用紙と共通していることがわかる。カミュは、1953年から54年頃という同じ時期に『裏と表』「序文」と『手帖』のタイプ化を行い、両者の推敲・修正を行っていたのである。カミュが「序文」で明言していた『裏と表』への回帰は『手帖』への回帰と重なっており、『手帖』の再読は、それまでの人生と作品の再検討を図る作業であったとともに、結果的に『最初の人間』執筆の準備作業にもなったと考えられる。

そもそも『裏と表』の「ウイとノンの間」でカミュがとりわけ描こうとしたのは、「永遠の中に停止した瞬間」、すなわち、息子が沈黙する母親と過ごした例外的な瞬間の記憶であった。その瞬間は、『見出された時』で詳説される「特権的瞬間」になぞらえて語られていながらも、実は、「現在の連続」という否応のない時の流れと死に対する不安から我々を解放してくれるプルースト的な瞬間では決してない。カミュは『シーシュポスの神話』で「不条理な発見は、そのとき将来のpassions（情熱＝受難）が正当化される絶え間（un temps d'arrêt）と同時に生じる」と述べているが、「ウイとノンの間」で語られる例外的な瞬間は、まさにこの「不条理な発見」の瞬間であり、学校から帰ってきた息子が夕闇の中に腰掛けている母親の「動物的沈黙」を発見する瞬間を、カミュはまさしく「絶え間」と書いている。この瞬間、母親の沈黙に恐怖を感じつつ息子が思いを馳せるのは、他ならぬ「死」—祖母の、母の、そして自分自身の死—なのである。

『最初の人間』においても、主人公の両親の人生と主人公自身の人生に関する真理の発見は、日常的な時間の流れが停止するような瞬間とともに訪れている。まず、ジャック・コルムリーが父親の墓の前で、父親が自分より若い年齢で死んだことを発見する場面がそうである。また、カテシム（公教要理）の最中に、母親の「日常的な神秘」がジャックの心に浮かぶ場面は、「ウイとノンの間」でカミュが描いた沈黙する母親の発見のシーンの焼き直しである。さらに、クリスマスの夜、外出先から戻った母子が自宅前に横たわる死体を目撃する場面で描かれるのは、「死のすぐ間近」に他ならない「現在」を絶えず生きてきた母親の人生とジャックの人生を結びつける「死のイメージ」である。

「失われた時は金持ちにしか見出されない。貧乏人にとって、失われた時は、ただ、死に向かう道のりの曖昧な痕跡を示すだけである」とジャックは言う。「絶えず現在を生きる」ことが「死の間近で生きる」ことに他ならず、死んでしまったら何らの痕跡も残さないという人生は、死んでいった父親の人生であり、いつの日か亡くなるであろう母親の人生であり、さらには「誰しもが最初の人間であった忘却の大地」に生き、死によって「最終的な祖国である巨大な忘却」へと戻っていった数多くのアルジェリアの人々の人生である。ジャックは、自身もまたその「最初の人間」の一人であることを悟り、最終的にアルジェリアという「祖国」に回帰することを願う。カミュにとって、『最初の人間』とは、痕跡を残さずに死んでいく名もない人々を尊重し、その「匿名性」にouiを唱えつつ、彼らに対する「忘却」にnonを唱えようとする作品だったのである。